

## 私の考える普及活動

八頭農業改良普及所 福田 義博

私が普及所に配属になったのは、昭和63年、県職員になって初めての職場、八頭農業改良所でした。ここでは、先輩普及員さんや先輩専技さん、さらに農協（現JA）の営農指導員さんに助けをいただきながら、野菜・花の担当普及員として、農家さんの手助けをしていたつもりでした。現場に一番近い普及員として、技術の支援や先進事例・事業等の情報提供など、すべきことがたくさんあり、農家さんに迷惑を掛けないように仕事をしていたように思います。



若い普及員時代は、とにかく足しげく農家さんのところに出向き、話を聞きながら、回答が必要な内容については、できるだけすみやかに返事するように努めていました。（あの時していたことがほんとに間違っていなかったのか今でも自問自答しますが…。）農家さんから「この病気や虫は何か？」と聞かれても、見るのが初めてで、その場ではわからない病害虫がほとんどで、持ち帰って農業技術体系や図鑑などを見ながら探したり、暗い実験室で顕微鏡をのぞいて調べたり、さらには園芸試験場に持ち込んで判断してもらったりとあたふたしていたように思います。また、栽培技術のみならず経営技術も必要とのことで、複式簿記の研修を受けましたが、当時は、伝票の記入や仕訳など簡単には理解できず、頭がフリーズしていたのに加え、金額が合わないと頭を抱えていたのが今となっては懐かしいところです。

これからも、正しいと思うことを精一杯、農家さんに伝えるつもりですが、信用してやっていただけるかどうか肝心なところです。基本的に人前でしゃべることが得意ではないと思いながら仕事をしています。普及はしゃべるのが仕事と言われます。そうは言っても、何の根拠もない話をしていてもいけませんから、調査データ等を活用し科学的な根拠をもとに伝えることを心がけています。経験や勘だけに頼らないところを支援するのが普及所の仕事だと思います。支援することによって、農家の方がもうかる農業を実践し、地域の担い手として活躍されるような方がどんどん出ていただければいいなと思います。

新人時代から30年経過し、現在また、八頭農業改良普及所で仕事をさせてもらっていますが、新人時代と変わらず謙虚でありたいと思いますし、やはり、普及員は大変だなと思います。自分が活動しただけの自己満足では結果や答が出ないものです。相手の心が動いたり、行動に現れたり、作物のできに変化が出たり、産地が動いたり対象の変化が結果に現れてくるものだと思います。そのためにも、時代の変化に対応（GAPやICTなど聞きなれない言葉や技術にも対応）し、今何をすべきかチーム（他の特技や専技さんも含め）で考えながら普及活動を引き続き実践していきたいと思っています。